

● 今回のテーマ ●

黄



～ Light of Hope ～

黄色は有彩色の中で一番明るい色。光や太陽のイメージが思い浮かびます。あたたかな陽の光やろうそくの灯りは、なんだか優しく包まれているよう…。どんな人にも、思い通りにいかなかったり、心が折れそうになったりすることがあります。でも、よく目を凝らしてみると、その先には光がさしているのかもしれない。そんな黄色い表紙の本を集めました。



『カラフル』

森絵都/著 講談社/刊 2011年 [YA K 913/刊]

一度死んだはずの「ぼく」は、中学生の真の体を借りて、もう一度人生に挑戦するチャンスをもった。天使らしくない天使、ブラブラによると、なんでもこの“ホームステイ”期間に自分の犯した罪を思い出さなければいけないのだとか…。周りの人の気持ちは、見えにくいもの。自分が思っているより、本当はすてきな場所にいるのかも。



『アドリブ』

佐藤まどか/著 あすなろ書房/刊 2019年 [YA K 913/刊]

ユージはイタリアで生まれ育った15歳。ある日、町のコンサートでフルートの美しい音色と出会う。「あんな音を出したい」と国立音楽院に入学し、日々練習に励んでいたが…。本気で目指しても、プロになれるのはひと握り。「才能ってなんだろう。」努力する熱意か、それとも自分を信じる覚悟か？ イタリア在住の著者の体験が活かされたリアルな青春物語。



『三つ編み ーラリタの旅ー』

レティシア・コロナビ/作 クレマン・ボレ/絵 新海知絵/訳 アンドエト/刊 2021年 [YA K 93/刊]

困難に直面する世界の女性たちの姿を描いた小説、『三つ編み』。その中に収録されている、インドの母娘の物語を絵本にしたのがこの本。少しでも人間らしい生活ができるように、娘を学校に通わせたいと願った母と、娘ラリタの命がけの旅が始まる。厳しい現実の中でも希望を失わない姿に胸を打たれる。美しいイラストにも注目。



『ぼくがスカートをはく日』

エイミ・ボロンスキー/著 西田佳子/訳 まめふく/絵 学研プラス/刊 2018年 [YA K 93/刊]

グレイソンは毎日鏡の前で、スカートをはいている自分の姿を想像する。黄色のズボンと金色の美しいドレスに。でも、最近は想像力もうまく働かない。「今朝は、もっと女の子らしく見えただのに。」みんなに秘密がばれたら、きっと大変なことになる。だけど、もうわかっているのは、ぼくは女の子だってことだ。



『きみの体は何者か』

伊藤亜紗/著 筑摩書房/刊 2021年 [YA K 496]

「もっと〇〇だったら…」。
誰しも一度は、自分の体について思い悩むことがある。背の高さ、性別、老い、死…。体は思い通りにならないけど、読めば悩んでいた気持ちが少し楽になる。ちょっとダメな自分の体も、健気でかわいいかも。もっと知りたい人へのおすすめ本も紹介。



『英語、苦手かも…?と思ったときに読む本』

デイビッド・セイン/著 河出書房新社/刊 2019年 [YA K 830]
苦手科目の勉強は心が折れてしまいがち…。どうにも英語から逃げられそうにない現代社会、英語が苦手という人も多いのでは？
自動翻訳機能、使ってもいいってホント!?
英語に対して身構えすぎていたんだと教えてくれる一冊。「英語なんて大嫌い！」というあなたも苦手意識が少しなくなるかも？

きたまち Y A ひろば
活動報告



ブック de トーク

& 2022 Y A 夏袋



7月17日(日)に今年度最初のきたまち Y A ひろばを開催しました。

第1回目のひろばでは、活動計画を立て、夏休みにおすすめの本をテーマに「ブック de トーク」(紹介型読書会)を行いました。紹介本のPOPを作ってもらい、中身が見えないようラッピングして、毎年恒例“Y A 夏袋”として7月24日から図書館で貸出をしました。今年度も楽しいイベントがたくさん！表面の予定を確認してね♪

